

【創作】

## 漫才と笑い噺集 ②

増田 辰良 経済学部教授

創作

## 漫才と笑い噺集 ②

増田辰良

## 目次

4. 新聞は知識や情報の宝庫です
5. 石狩鍋
6. 知識と知恵
7. 笑い噺 実態です

## 4. 新聞は知識や情報の宝庫です

- 漫才コンビ K & M (けいと&まさと) が舞台へ登場する。
- K 君も知っているとおり、僕は新聞を読むのが好きでね。
- M (客席へ) この男ねえ、そりゃ、もう新聞、好きですよー。暇があったら、所かまわず広げてますから。楽屋、食堂、電車にタクシーの内。<sup>なか</sup>
- K まあ、読むのは楽しいし、(客席へ) 読むことはいいいことですよ、ねえ。
- M 楽しいと言っても、限度がある。
- K どんな限度?
- M トイレへ持って入るのだけは止めてくれ、頼むから。大便をしな

- がら読むのだけは止めてくれる?
- K そんなことホットイレ。
- M 何をシャレてるの?
- K いいじゃないのよ。用を足しながら、知識も情報も足してるし。また、シャレかい。知識も情報も足してるのはいいいけど、用が済んだら早く出て来てよ。次の現場に間に合わないことがあったら。
- K あー、あのときはごめん。読み始めると、時間の過ぎるのを忘れて、つい全部読もうとするから。
- M この前も次の現場へ着くのが遅れて、みんなに迷惑かけて、ほんと頼むからトイレへだけは持つて入らないでくれる?
- K 分かったよ。これまでかけた迷惑は水に流してよ。今後、気を付けるから。
- M トイレで水に流す。(呆れて) しょう(小) もないシャレ。
- K そりゃ、座って用を足すのだから大<sup>だい</sup>はある。
- M おお。お返しかい。でも、読む記事ってそんなにあるかい?
- K あるよ。

キーワード：新聞、石狩鍋、知識と知恵、笑い噺

M 君は僕を心配させるほど読んでるけど。  
 K 心配してくれてありがとう。でもねえ、考えてみてごらん。新聞  
 くらい安い買物はないよ。  
 M 安いと言うところをみると、駅のゴミ箱から拾うのね。  
 K 拾わないよ。  
 M 電車の網棚あみだなに置き忘れたものを黙って、そつともらうとか。  
 K そんなケチくさいことはしない。ちゃんとお金を払って買ってま  
 す。  
 M 君が安いと言うから。タダより安い物はないって言うし。  
 K わずか、1部130円足らずで、政治、経済、社会、芸能、文学、  
 科学、スポーツ、あらゆる知識や情報が掲載されている。それも  
 最新のものが。  
 M 君。一つ忘れてるよ。  
 K 何を？  
 M 何を？ だって僕が一番必要としているテレビの番組欄も出てたはず  
 だよ。  
 K (相方を見て) 確認するけど、「出てたはず」ってことは君、新聞  
 を読んでないの？  
 M うん。購読するのは止めた。  
 K 止めたあ。まあいい。それよりも、君はテレビの番組欄を一番必  
 要としてるのかい？  
 M そう、僕にとっては1日たりとも欠かせない。必需品だよ。  
 K それ以外の情報にももつと興味を持ちなさいよ。テレビって子供  
 みたいだろ。  
 M 僕は読むよりも観たり、聞いたりして知識や情報を手に入れてる  
 から。スマホでサツサツサツと。それに新聞は嵩張かさばるからね

え。部屋に置いておくと邪魔だし。  
 K 嵩張るって。観たり、聞いたりするよりも読むほうが頭を使うよ。  
 M 紙の新聞を読みなさい。新聞だとスクラップもできて……。  
 K (呆れて) 君、変わった趣味があるんだねえ。  
 M 何？ 趣味って？  
 K だって、新聞にスグにラップを掛けるって。掛けてチンするの？  
 M 掛けないよ！ チンなんてしないよ！  
 K あゝ、携帯電話に付ける、紐ひもの先に人形なんか付いた……。女  
 子高生が好き……。  
 K それはストラップ。  
 M (相方を指して) あゝあゝ、このスケベー。恥ずかしいから新聞  
 を使って見るの？ 穴を開けて、覗くようにして、スケベー。  
 K 君！ 何か勘違いしてないかあ。君の頭に浮かんでいるのはスト  
 リップだろ。  
 M 当たり、当たり、大当たり！ このスケベー！  
 K 誰が、ラップとかストラップとかストリップって言った？ え  
 えっ？  
 M さつき、君が言ったでしょ。新聞にスグにラップする、ストラッ  
 プする、ストリップって。  
 K ラップでも、ストラップでも、ストリップでもなくて、いいかい、  
 ス・ク・ラッ・プ、スクラップだよ。  
 M ス・ク・ラッ・プ？ 何？ そのスコップじゃなく、スク  
 ラップって。  
 K スクラップと言え、興味のある新聞記事を切り抜いて別のノー  
 トにファイルする、綴とじておくことでしょうか。  
 M ははは。子供の頃に似た切り抜きのことね。

K 早い話が、そう、切り抜きだよ。  
 M で、それをどうするの？  
 K (語気強く) 僕はねえ、いいかい、漫才のネタを作るときに、知識や情報として使うのさ。ファイルから記事を抜き出して、読み直すのさ。  
 M そんなに新聞が役に立つかい？  
 K 立つよー。ネタはいつも僕が作ってるから君は新聞記事のありがたみが分からないのさ。  
 M (頭を下げ) いつもネタ作りではお世話になってます。はい。感謝しております。  
 K 「おります」って、本当に、感謝してる？  
 M してるよ。してますよ。ネタだけは新鮮、シャレは古いしサジ抜き。  
 K それじゃ、安物の鮎だろ。  
 M まあ、それくらい感謝してるってことさ。  
 K まあ、いいや。で新聞を読むと、たくさん勉強できるし、色んな新しい知識や情報を手に入れることができるんだ。  
 M たとえば、どんな新しい知識や情報なの？  
 K じゃ、今日は君に幾つか教えてあげるよ。(拳を口に当て)へっへん。大学の先生みたいだね。偉そうで。  
 M その大学の先生たちがした研究成果も新聞には出てるよ。役に立つことばかりだよ。  
 M (相方を軽く小突き) さっそく、教えて、教えてよ。  
 K じゃあ、君に聞くけど、ストレスを感じることである？ ストレスが溜まることってあるかい？  
 M いきなり、ストレスときたか。あるよー、あるー。ストレスを

K 溜めるのだけは得意だよ。あゝあ、あゝあ。  
 K あゝあって、溜息ついて、君。  
 M ストレス溜めずに金貯めたい！  
 K その銀行の広告みたいな台詞はいいから、ストレスが溜まるのはどんなとき？  
 M (首を垂れて) 漫才でスベツテ、君から叱られたときかな。  
 K 漫才スベルな、雪山をスキーで滑れ！  
 M スベルと、ほんとストレスが、ねえ。  
 K ああ、そうだよなあ。僕も叱りたくないけど、君はよくスベルからごめんごめん。  
 K 暖簾に向かってパンチを繰り出している感じだよ。  
 M 僕は暖簾かい？  
 K そうだよ。さっぱり手ごたえがない。  
 M どうもすみませんー。  
 K 威張るように言わないの。まるで君の人生は滑り台だよ。いや、ゼットコースターの天辺のない下りコースのみだね。  
 M (ニコツと笑い) そんなに褒めないで。  
 K 褒めてないよ！ 貶けなしてるの。(客席へ)お客さんの前ですけど、この男はですねえ、前人未到の記録を持ってるんですよ。  
 M また、褒めて。  
 K 褒めるもんじゃない、恥だ！ この男、大学を7つも受験して、6つスベツテ落ちたんですよ。いますかあ、6つもスベル受験生が。  
 M (怒) いるんだよ！ ここに。7つ目は合格したよ。  
 K 怒ってどうするの？ 自慢するなよ。  
 M 僕のことはいいいから、ストレスのことを。

- K そう、ストレスだよ。君は漫才をスベッタとき、そのストレスをどうやって解消してるの？
- M もちろん、すぐに台本を読み直してもっと練習をするけど、僕の場合は一度、反省すると、その後はもうその失敗を考えないようにしてるよ。
- K その姿勢だけはいいい。褒めてあげるよ。そう。いつまでもスベッタことを悔やんでもどうしようもない。次に頑張ればいい。で、そんなことで解消できるの？
- M まあ、深刻なときは軽く酒かビールを飲んで、カラオケで歌いまくって発散して、後はひたすら寝ちゃう。おしっこして寝ちゃうのが一番いいよ。よく「寝る子は育つ」って言うじゃない。
- K 今さら育つてもねえよ。
- M 育つ、成長したいよ。
- K でもねえ、いいかい、今の話題の中に3つ、大切なことがある。教えてあげたいことがある。
- M ええっ？ 何よ、3つの大切なことって。
- K 簡単なほうから言うと、1つ目は「おしっこ」、2つ目は「寝る子は育つ」、3つ目は「ストレス」だよ。
- M 大切なのは漫才ではなく？ 漫才じゃないのね、ほうほうほうほうほうほうじゃない。昼間なのにフクロウみたいに啼いてちゃいけないよ。この3つについて、新聞には詳しいことが書かれてるから。
- M そんなことが新聞に出てるんだあ。記事を書く人も暇だなあ。
- K 暇じゃない。順番に教えてあげるよ。
- M はい。お願いしますよ。最初は「おしっこ」ね。
- K おしっこをするとブルブルブルってなることがあるだろ？ あれ
- M は何でなると思う？
- M あれは温かいおしっこが体の外に出ると体温が下がるから、それを防ぐ、体温を戻すために体を動かして、体温を上げようとしてる、って聞いたことがある。条件反射のようなものかな？
- K それが素人の浅ましさ。素人チンチロリン。
- M そんな言い方はないだろ。浅ましいなんて、おまけにチンチロリンなんて。
- K 本当の理由はそうじゃない。
- M へっつ、違うんだあ。
- K あくまでも仮説だけど、これは神経を伝わる信号の「配信ミス」だよ。
- M 信号の「配信ミス？」
- K そう配信ミス。
- M 交差点は大変だあ。渋谷のハチ公前なんかだとパニックになるぞー。
- K 交差点じゃない。神経の話をするから真剣に聞きなさい。
- M (笑) 神経と真剣のシャレねえ。(天井を見上げ) あくあつと。
- K そう。おしっこを溜める膀胱は神経で脳とつながっている。
- M 膀胱はおしっこを溜めるプール。
- K そう。だからといって、プールでおしっこをしてはいけない。
- M 脳ミソの弱い僕にもそれを理解する神経はある。
- K いいや、君は脳も無ければ無神経。
- M それじゃおしっこできないよ。
- K プールでしなきゃいい。
- M そうじゃなくて。膀胱は神経で脳と……。
- K はいはい。脳からの指令に従って膀胱が縮むとおしっこは出る。

このとき「おしっこをしますよ」という返事の信号が膀胱から脳へと向うんだ。

M 膀胱と脳が神経を通して情報の交信をしている。

K そう。その信号の一部が脳へ進まないで、枝分かれしている別の神経に入り込んで、筋肉のほうに向かい、それを受け取った筋肉が「動け」という命令だと誤解してブルツブルツってふるえるのさ。これはラットというネズミの仲間を使って解明されていることだよ(『朝日新聞』、2018年1月27日)。

M なるほど。そっかあ、これって借金取りへの反応と似てるなあ。

K 借金取り?

M そうだよ。借金を返せ! って言われるのが怖くて、その人の顔を見るとブルツブルツとなるだろ。怖くて、おしっこをちびつちゃうだろ。

K おしっこをちびる前に借金を返しなさい! 次、行くよ!。2つ目は「寝る子は育つ」。

M 「寝る子は育つ」

K これは正しい。

M そう、正しいのね。

K その前になぜ眠くなったり、眠いのに寝付かれないことがあるのか、これを考える必要がある。

M うんうん、大学の講義みたいだね。

K ようやく受かった7つ目の大学でも講義中は寝てたんだろ? 君のことだ、きつと。

M 「寝る子は育つ」だから寝ても卒業できたよ。

K 威張るんじゃない。そんなことだから、漫才をスベルのさ。

M 滑っていいのはスキーとスケート!

K (咳払い)んんっ。新聞を読めば出てるから、いいかい。眠ったり、目覚めたりする仕組みは脳の中にある。

M また、弱いNOミソの脳かい?

K YES!

M NOに對するダジャレね。白ける。

K 脳の中心部にある視床下部で作られる「オレキシシン」という物質がたくさん出ると覚醒中枢が活性化して目覚めの状態が続く。一方、「オレキシシン」の量が少なくなると睡眠中枢の働きが強くなって眠くなるんだな。

M そうだよ。そのとおりだよ。

K 「そうだよ。そのとおりだよ」って、君はこのことを知ってたの? 知るも知らないも、折木信は僕の友人だよ。

K 君の友人?

M そう、折木信。あいつとは幼稚園からの幼馴染でさあ。バスケットボールが上手くて。でも、あいつは目付きが怖いから、睨まれると、みんな目が覚めるんだ。

K (相方を見て) 僕が真剣に説明してるのに、君は幼馴染のことを……。

M だって、君がオレキ・シンに会うと目覚めるし、いなくなると眠くなるって言うから。

K 違うだろ。今は脳の話してるのよ。しっかりしろよ。だからスベルんだ。

M NOだのにYESだったよね。

K もういいよ。で「寝る子は育つ」だけど、寝ている間も脳は活動している。寝ることによって昼間のうちに学習した記憶を整理してるんだ。それから、寝ることは一度記憶したことを忘れないよ

うにする役割もあるんだ。記憶力を維持するってこと。だから、子供が成長するためには「寝る」必要があるのさ（『朝日新聞』、2018年1月6日）。

M じゃあ、お年寄りがあまり寝ないで済んでいるのは成長しなくてもいいからということかい？

K まあまあ、そう理解していいだろうよ。お年寄りのことよりも自分のことを心配しなさいよ。

M （明るく）僕はいくら寝ても漫才ではスベル、スベル。

K それは学習しないからだよ。

M （明るく）ただ、寝てるだけ。

K そう。君の場合は目を開けて寝ている。魚みたいだ。

M そんな器用じゃないですよ。

K じゃあ、しっかりしてよ。

M はいはい、最後は「ストレス」だね。

K そう。これが一番やっかいかな。

M 百回<sup>ひゃくかい</sup>って？ ストレス、それ以上、感じてるよ。

K やっかい。大変なこと。

M ああ、百回じゃなく、やっかいね。

K 君、ストレスで胃が痛くなったことってないかい？

M あるよ。ある、ありますよ。

K またかあ。

M （自分の股を見て）ええつ。股がどうかした？

K （咳払い）んんっ。真剣に聞いて真剣に答えなさいよ。

M じゃあ、また神経の話ね。

K そう。それで、どんなときに胃が痛い？

M 借金取りに追われているとき。

K また、借金かい？ よし、この際、聞こう。

M 何を？

K 借金借金って、いくら借金してるの？

M うん。2000円。

K 2000円!? 君ねえ、大人の男が2000円の借金で胃を痛くするかい？

M するんだよ。君には債務者の気持ちが分からないんだ。どんなに辛いか。

K で、誰から借りてるの？ そのわずかな借金。

M ……。

K 答えなさいよ。

M だって、怖いもん。

K 怖いって、ここへはその借金取りは来ないだろう？

M 家に帰ればいるよ。必ずいるんだ。

K 家にいる？ 待ち伏せしてるの？ この誰？

M （しらっと）女房。

K 何って？

M だから女房。

K 女房って、あの鬼瓦みたいな、いや仁王様のような顔の、あのブスの上に下の付く、君の奥さんかい？

M 鬼瓦とか、仁王様とか、ドブスとか、言わないでよ。

K 最後のドブスはまだ言っていない。ありやあ、誰が見ても怖い、怖い。あの顔を見るだけでストレスを感じるよ。ストレス製造<sup>せいぞう</sup>顔<sup>が</sup>って言うんだ、あの顔を。

M だろ。

K 君が認めてどうするの。今日のギャラで返してしまいなさい。夫

- 婦人だから。
- K ご忠告ありがとう。そうするよ。
- M でもねえ、借金のことを考えると胃が痛くなるっていうのは、よく言うだろ、「病は気から」って。気持ちの持ちようによってストレスになるのさ。
- M 眠いのには、よく眠れないこともあるんだよなあ。
- K さっきのオレキシンの作用だよ。
- M いや、原因は「返しなさい！」って怒鳴られる催促さ、脅しさあ。
- K そうかい。睡眠不足など慢性的なストレスが溜まると、脳のある特定の血管部分にわずかな炎症がおこり、通常ではない神経回路ができて胃の不調をもたらしているそうなんだ。これもマウスを使った実験で説明されているから(『朝日新聞』、2017年8月16日)。
- M なるほどお。ストレスが異常な神経回路を作るのかあ。NOだったものがYESになるんだあ。
- K このストレスは他にもややこしい問題を引き起こす。
- M もっと教えてよ。
- K 教えるより。ときにはストレスが人間関係を悪化させることもあるぞ。
- M どんなふうには？
- K よく子育ての疲れから、孤立感が高<sup>あ</sup>じて、ストレス状態が高くなる母親がいるって聞くだろ。
- M そうそう聞く。母親にとっては子育ては重労働だから。ストレス溜まるわな。
- K ストレス状態が高い母親は周りの大人の表情から気持ちを読み取る脳の部位の活動が低下しているそうだよ。
- M 相手の気持ちを思い遣れない状態になってるんだ。
- K そう。でも、子供の気持ちを推測する部位には変化はないそうなんだよ。
- M まだ、救いがあるんだね。
- K だから、子育てでストレスが深刻化する前にそんな症状を見つけてあげて対処してあげると、母親の子育て中の対人関係を悪化させなくてすむ(『朝日新聞』、2018年2月6日)。
- M なるほどねえ。ストレスは意外なところで悪さをするんだな。
- K こんなことも聞いたことあるだろ。
- M どんなこと？
- K ストレスが溜まると甘い物を食べたくなるって。チョコレートとかさあ。
- M あ、あるある。それなら教えられなくても体験してるよ。
- K そうだろ。この原因もマウスを使って説明されつつあるんだ。
- M また脳かい？
- K YES! これもさっきの視床下部にある神経細胞の「CRHニューロン」が関係している。
- M ニューロンでもロソソンでも住宅ローンでもなく、ニューロンね。
- K そう、ニューロン。このニューロンはストレスを受けると活性化することが分かったんだ。
- M どんなふうには調べたの？
- K マウスを使った実験で、マウスの好物は本来、脂肪食なんだけど、ニューロンを高めてみると、マウスの炭水化物の摂食量が9・5倍も増えたんだ。ニューロンを抑制すると、好物である脂肪食を多く食べたんだよ。脂肪や炭水化物の食べすぎは肥満の原因だから。



M 暇(ヒマン)だからつい食べ過ぎる? 暇と肥満の……。

K 違う。ニューロンの影響だよ。

M ニューロンねえ。

K そう。だからこの結果をより詳しく調べれば、肥満の人がなぜ肥満になりやすい物を食べたがるのかを解明できそうなんだ(『朝日新聞』、2018年1月17日)。

M なるほどねえ。食べたって命令する物質があるんだな。

K そうだよ。

M それを解明しようと、科学もずい分と進んでいるんだね。

K 君ねえ、感心ばかりしてちゃいけないよ。

M ええっ。どうして?

K どうしてって、今、僕は君にストレスの話をしてるんだよ。

M そうだよ。(語気強く) いつになく神経を使って真剣に聞いているよ。

K もっと怖いこともあるぞ。

M へーっ。うちの女房!?

K 違うよー。君の奥さんには誰も興味ない。あの鬼瓦の、ドブスの、ストレス製造顔なんかには。

M (相方を軽く小突き) じゃ、うちの女房よりも怖いものって?

K ストレスを高く感じている男性は肝臓ガンや前立腺ガンに罹りやすいという分析結果もある。

M (驚き) そっそれはイカ食<sup>く</sup>わんぞう。違った、食わんじゃなく、イカンゾウ、胃にも肝臓にも良くない。

K ……。

M 男性はストレスを解消すると言っては、アルコールを飲む人が多いから。肝臓に良くない。

K 確かにそうだよな。

M 前立腺については男性にしかないからね。

K 調査結果によると、男性で最もストレスが高い人たちは最も低い人たちと比べて、ガンの発症リスクが19%も高かったんだ。

M 19%も高いの! 19と言え、二十歳<sup>はたち</sup>の手前だよ。

K あたり前なことは言わないの。タバコを吸う人や酒を飲む習慣のある人、さらに肥満の人はストレスが高いとガンになりやすい。とくに、前立腺ガンはストレスと関係があるホルモンにより増殖しやすいと言われている(『朝日新聞』、2018年1月20日)。

M そうかあ。じゃあ、もうタバコも酒も止めよう。

K 今日限り止めたほうがいいよ。止めなさい。ついでに鬼瓦の、ドブスの、ストレス製造顔のあの奥さんとも別れば……。

M (思わず、明るく) そうすりゃあ、女房から借金をしなくてすむ。ストレスも無くなるぞ。(気づいて、相方を軽く小突き) 何てことを言わせるの、僕の大切な女房ですよ。

K 大切な女房はいいとして、何? 君はタバコと酒代を奥さんから借りてたのかい?

M そう、そうなんです。ハッハッハッ。

K 笑うな。まあ、なさない男だな。聞いて呆れる。

M まだ、長生きしたいから。この際、タバコも酒も止めますよ。

K 止めてもらって、長生きしてもらわないと、僕も困るよ。

M 相方だからねえ。

K 漫才がスベツテ感じるストレスは練習をして、話術を磨くしかない。(相方の肩を軽く叩き) ねえ、君。

M (語気強く) ストレスから逃げないで、もっと話術を磨く。これしかないかあ。

K そう、練習しかない。(左手を腰に右腕を突き上げ) ストレスに負けるな! ドブスの、ストレス製造顔の奥さんにも負けるな!

M (左手を腰に右腕を突き上げ) 負けるな! (相方を見て) 僕はボケ役だからなあ。素が利口なだけに、ボケづらい。

K で、どう、新聞を読むと、こんな有益な知識や情報を得ることができるだろ。

M (投げ遣りに) そうねえ。確かに、たくさん知識や情報を得ることとはできるけどお。

K できるけどお?

M 金がかかるし。

K これで新聞1部、130円。安い買物だろ?

M (しらっと) 僕はこれまでどおりスマホやテレビのニュースを観るよ。

K なぜ? わずか130円でこれだけの知識や情報を手に入れることができるんだよ。今日の話で分かっただろ?

M 君は新聞1部に130円も払っているようだけど、もっと、安くかつ簡単に手に入れる方法があるよ。僕だったらタダで手に入れるねえ。

K 駅のゴミ箱から拾うとか?

M そんなケチなことほしくないよ。

K 電車の網棚に置き忘れてある物をこっそりもらうとか。

M そんなこともしなくていい。

K じゃあ、君はどうやってタダで手に入れるの?

M 今日のように新聞を読む君から知識や情報を教えてもらえばいいんだよ。

K そりゃあないよ。(了)

## 5. 石狩鍋

—漫才コンビ K & M (けいと&まさと) が舞台へ登場する。

K 寒くなってきたねえ。

M ああ、寒くなってきた。

K こう寒いと身体の芯から温まるものを食べたいねえ。

M そう。身体の芯から温まるものをね。

K こんなとき、君は何を食べてるの?

M そうだなあ、僕は鍋を食べてるよ。

K ほう、鍋を? どれくらいの頻度で?

M まあ、好きだから、この季節、1週間に3回は食べるね。

K そんなにたくさん食べられるかい? 腹を壊さないかい?

M そりゃあ、もう好きだからさ。好きなものには目がなくて言うでしょ。腹なんて壊さないよ。健康そのもの。

K でも、それじゃあ、ずい分と出費するだろ?

M そんなことないよ。1週間に3回だけだもの。

K (感心し) 君は偉い!

M わたしのどかが偉いの?

K 鍋屋にずい分と貢献してるもの。僕なんて、ほとんど貢献してないよ。

M どこで、わたしが鍋屋に貢献してるの?

K だって、君、週に3回も鍋を食べてるんだろ?

M うん、好きだし、身体の芯から温まるからね。

K そら、ごらん。1週間に3つも鍋を買う人なんていないって。

M ……? 誰が鍋を3つも買うの?

K 君だよ。君がさつき鍋を1週間に3つ食べるって……。

M どこに鍋を3つも買って、そのうえ食べる人間がいるの？

K 君があ、さつき、鍋を……。

M 常識で考えなさいよー。

K あー、鉄の鍋よりも土鍋のほうが食べやすいかい？ 土鍋かあ。

M 違うー、違うよー。誰も鉄の鍋や土鍋を食べると言っていない。

K さつき、君、言ったよー。で、やっぱり、土鍋のほうが食べやすいって胃に優しい？

M まだ、言うのかい？ 僕が食べるのは器の中身の具だよ。

K 器の中身の具？

M 君は鉄や土で造られた器そのものを食べるものと思ってるだろー。

K 君は歯が丈夫そうだから。ビーバーみたいな歯をしているもの。きつと食べられるよー。

M 食べられません。器の中身の具を食べるの。

K 具ねえ。

M そう。中身の具によって鍋の呼び方も変わるから。

K ほう、ほう、中身の具で変わりますかあ。

M 変わるよー。

K じゃあ、中身の具といいますと。

M そりゃあ、もう色々ありますよ。

K どんなもの。

M ドジョウなんていいねえ。精力がついて。

K ドジョウって、♪ドジョウが出てきて、こんにちは♪ のドジョウ？

M そう、ドジョウが入ればドジョウ鍋。

K 食べられるドジョウに同情します。

M シヤレなくていいの。

K じゃ、コイが入ればコイ鍋。

M まあ、そうだね。

K タコが入れば茹でダコ。

M 違う。タコが入ればタコ鍋。

K タコ、真っ赤になって茹で上がるよー。

M それでもタコ鍋。

K そうかあ、何を入れてもいいんだあ。

M 鍋はその家ごとに入れる具が違っていいから、面白いし、楽しいのよ。

K でも、一般的な中身の具って、何かなあ。

M まあ、みんながよく食べる、入れる具はトリかな。

K トリかあ。トリねえ。

M そう、トリが入るとトリ鍋。

K トリが入るとトリ鍋。

M そう。

K 早く、蓋をしないと暴れて大変だろうねえ。

M なぜ、暴れるのよ？

K だって、鍋にトリを入れるんだろ。嫌がって暴れるだろ？

M 生きたトリは入れないよー。

K じゃ、死んでしまったトリを入れるの？

M 一応、死んではいけど、健康なトリであって、病気持ちのトリは入れない。

K どんなトリ？

M カシワを入れるんだよ。

K カシワ？ カシワ？

M そう。  
 K カシワって食べられるの？  
 M 食べられるよ。誰でも食べてるよ。きつと君も食べてるぞ。  
 K へーっ。食べたことないよー。あんな葉っぱのどこが美味しいのか  
 M ねえ。苦<sup>にが</sup>そうだけとお。  
 M 葉<sup>か</sup>っぱ？  
 K 柏餅<sup>かしわもち</sup>を包む葉っぱ。  
 M あんなものを食べる人はいませんよー。  
 K カシワって何？  
 M 君、カシワも知らないの？  
 K (威張<sup>い</sup>張<sup>ちやう</sup>つて) 知らないの？つて、教えてくれればいいでしょ。  
 M 威張<sup>い</sup>な！ ニワトリのことでしょ。  
 K ニワトリ？(頭<sup>あたま</sup>に手をかざし) カラスの赤ちゃんが欲<sup>ほ</sup>しがつてい  
 M る赤<sup>あか</sup>い鶏冠<sup>とさか</sup>があつて、コケコッコーつて鳴<sup>な</sup>く、あのニワトリ？  
 K そう。そのニワトリがカシワだよ。  
 M へーっ。知らなかったなあ。ニワトリがカシワだったとは。  
 K そう、カシワだよ。それ、よく聞<sup>き</sup>くだろ。  
 M 何を？  
 M 昔<sup>むかし</sup>の偉<sup>い</sup>い人で幼名<sup>おんなな</sup>と出世<sup>しゅっせ</sup>してからの名前<sup>なまえ</sup>が違<sup>ちが</sup>う人<sup>ひと</sup>つているだろ。  
 K たとえば？  
 M たとえばだねえ、あの西郷隆盛<sup>さいこうたかもり</sup>という人物<sup>じんぶつ</sup>の幼名<sup>おんなな</sup>は小吉<sup>しょうきち</sup>で、出世<sup>しゅっせ</sup>  
 K してから隆盛<sup>たかもり</sup>に改名<sup>かへなまえ</sup>したのさ。通称<sup>とうしやう</sup>まで持<sup>も</sup>つていたそうだよ。  
 M なんだ？  
 K 吉之介<sup>きちのすけ</sup>、善兵衛<sup>ぜんべゑ</sup>、吉兵衛<sup>きちべゑ</sup>、吉之助<sup>きちのすけ</sup>と順次<sup>じゆんじ</sup>変<sup>か</sup>えたそうだよ。  
 M ほう、ほう、ほう。ニワトリの雛<sup>ひな</sup>が出世<sup>しゅっせ</sup>すると改名<sup>かへなまえ</sup>してカシワ  
 K になるのかあ。

M まあまあ、そう、そう理解<sup>りかい</sup>しておきなさい。君<sup>きみ</sup>にはそれが簡単<sup>かんぱん</sup>だ。  
 K 十分<sup>じふぶん</sup>だあ。  
 K カシワってニワトリの肉<sup>にく</sup>だとばかり思<sup>おも</sup>つていたけどお、そつかあ。  
 M (怒<sup>いか</sup>) おい！ 知<sup>し</sup>つてるなら聞<sup>き</sup>くなよー。  
 K その他の鍋<sup>なべ</sup>といひますと。  
 M ボタン鍋<sup>ボタン鍋</sup>。  
 K ほう、ほう、ほう、ほう。(上着<sup>じやうせき</sup>のボタンに手<sup>て</sup>をやり) 今度<sup>こんど</sup>は  
 M ボタンをこうちぎつて鍋<sup>なべ</sup>に入れて、食<sup>く</sup>べるの？  
 M そんなもの食<sup>く</sup>べられるかあ！ こんなボタンが。  
 K だつて、君<sup>きみ</sup>がボタンを鍋<sup>なべ</sup>に……。  
 M 違<sup>ちが</sup>う！ この場合<sup>ばあひ</sup>、ボタンとはイノシシのことさ。  
 K ボタンはイノシシのことかい？  
 M そう、イノシシ。これも日本人<sup>にほんじん</sup>なら誰<sup>たれ</sup>でも知<sup>し</sup>つてる。  
 K じゃあ、ワイシャツ<sup>ワイシャツ</sup>のボタン<sup>ボタン</sup>がとれたとき、女房<sup>にようぼう</sup>に「おい。イノ  
 M シシを付<sup>つ</sup>けてくれ」つて頼<sup>たの</sup>むのね？  
 M 違<sup>ちが</sup>うだろ。これもさつきと同じで、イノシシの肉<sup>にく</sup>をボタンと呼<sup>よ</sup>ん  
 K てるんだよ。  
 M 幼名<sup>おんなな</sup>と出世名<sup>しゅっせなまえ</sup>との違<sup>ちが</sup>いかい？  
 K まあまあ、説明<sup>せつめい</sup>すると長<sup>なが</sup>くなるから、イノシシの肉<sup>にく</sup>はボタンと覚<sup>しやく</sup>  
 M えておきなさい。ついでに言<sup>い</sup>えば、鹿<sup>か</sup>の肉<sup>にく</sup>はモミジ、馬<sup>うま</sup>の肉<sup>にく</sup>をサ  
 K クラつて呼<sup>よ</sup>ぶんだ。  
 K はいはい、馬<sup>うま</sup>なら、僕<sup>わが</sup>でも知<sup>し</sup>つてるよ。  
 M へーっ。馬<sup>うま</sup>の肉<sup>にく</sup>をサクラつて呼<sup>よ</sup>ぶことを知<sup>し</sup>つてたの？  
 K 知<sup>し</sup>つてるよ。  
 M どうして、知<sup>し</sup>つてるの？  
 K 競馬<sup>けいば</sup>に桜花賞<sup>おうかしやう</sup>があるんだな。(笑<sup>わら</sup>) これ<sup>これ</sup>がサクラだあ。

- M (咳払い) んんっ。鍋は、北は北海道から南は九州・沖縄まで地域ごとに中身の具が違って呼び方も色々あるけど、僕たちの故郷である北海道で鍋と言えば、そりゃあ、もう石狩鍋いしかりなべだろうね。
- K 今度は石を鍋に入れるってかい？ 君はほんとに固いものが好きだねー。いよいよビーバーだな。
- M なぜ？
- K だって、石かじり鍋って？
- M よく聞きなさいよー。石かじりじゃなくてえ、い・し・か・り・なべ。石狩鍋だよ。
- K 石でなきや、中身の具は何を入れるの？
- M 主役はシヤケだね。
- K ほう、ほう、ほう、ほう、ほう。
- M フクロウみたいに啼く数が増えるねえ。北海道だから、シマフクロウかい？
- K 鳥だけに、一石二鳥だね。
- M 何が一石二鳥なの？
- K 鍋にスープとして酒を入れるんだろ？ 女房がお爛をする手間が省けるよ。
- M その酒は入れない。
- K だって、酒って？
- M 飲む酒じゃなくて、シヤケだよ。
- K サケ。
- M 違う。よく聞きなさい。シヤ、シヤ、シヤだよ。シヤケ。
- K (真似して) サツサツ、サケ。
- M 違うだろ。(中指をそえて) 僕のこの唇をよく見てごらん。
- K どす黒いねえ。どこか悪いんじゃない？ 一度、医者に診てもら
- M いなさい。
- M 違う。色じゃなくて、唇の動きだつて……。シヤ、シヤ、シヤケ。
- K (真似して) サツサツ、サケ。
- M いいかげんにしろ！ サケもシヤケも同じもの、サケイコールシヤケ。
- K へっっ。同じものなの？
- M そう。同じものだよー。
- K でも、なぜ、石狩鍋って呼ぶのかね？
- M おい、君も北海道生まれの北海道育ちだろ。
- K そうだけどお、親父おやじが本州の出身でさ、鍋よりもすき焼きをよく食べてたから……。
- M まあ、いいよ。ここで理解してくれば。
- K じゃあ、この際、教えてもらおう。
- M 石狩は北海道の地名でさあ、明治時代にサケが産卵のために遡上さもようしてくる石狩川河口の漁師さんたちが賄い料理として味噌汁の中にサケのぶつ切りやアラ、野菜などを入れて食べていたものを、明治13年創業の割烹『金大亭』きんだいていが世に送り出したそうさ。だから、石狩地域がこの鍋の発祥の地とも言えるかな。
- K なるほど、地名が呼び名になったと。
- M そう、そう。
- K で、サケイコールシヤケって何？
- M おい、サケやシヤケの意味も知らないで聞いていたのかよー。
- K (しらっと) 聞いてたよー。
- M それじゃあ、駄目でしょ。
- K だから、改めて聞いたのよー。教えてーちょうだい。
- M サケもシヤケも魚だよ。魚の鮭さけのこと。

K そら、サケでしょ。もしかしてただけどお、サケが幼名で出世名が  
 シャケ？  
 M う〜ん。どう言えば理解してもらえないかなあ。  
 K う〜ん。どう聞けば理解できるかなあ。  
 M 魚のサケを鍋に入れるために切り身にしたものがシャケだよ。  
 K スーパーに並んでるよ。  
 K 切り身にされても出世かよお。  
 M 何か文句ある？  
 K この場合、切り身にされるわけだから、出世じゃなくて切腹でしょ。  
 M 切腹ならどうなのよ？  
 K 死んじゃうわけだから戒名かいみょうでしょ。  
 M じゃあ、君はシャケとはサケの戒名と言いたいのね？  
 K あえて言えばそうかなあ〜って。死んだものより、生きてるほう  
 を食べたいよ。  
 M どっちでもいいよ。  
 K な〜んだあ、どっちでもいいのかあ。  
 M このサケは川で生まれて、海へ出て成長し、再び、生まれた川へ  
 戻ってくるんだ。これを『母川ぼせん回帰かいき』と呼んでいる。  
 K サケは出世して切り身になるために戻ってくる？  
 M いいや。秋になると生まれた川で子孫を残すために産卵をしに  
 戻ってくるのさ。  
 K ちようど鍋が恋しくなる季節だな。どれくらい海にいて、川へ  
 戻ってくるのよ？  
 M そうだねえ、3年から5年ってとこかな。  
 K えっえーっ！ 切り身になるのに3年から5年もかかるのかい？  
 M どうしたの？ 大きな声を出して。

K 大変だよ。  
 M 何が？  
 K だって、女房に朝「おい、今日は寒いから、晩飯ばんめしは石狩鍋にして  
 くれ。サケの出世した切り身のシャケを買っておいてくれ」って  
 頼みながら、僕の口に入るまでに3年から5年も待たなきゃなら  
 ないのかよー。  
 M 違う！ しっかり理解しろよ。  
 K もし、サケが出世を望まず、あるいは切り身にされたくなくて、  
 生まれた川へ戻ってこなければ……。 (泣) くつくつくつ。  
 M 泣くなー。戻ってくるよー。  
 K なかには戻ってこないサケもいるだろー。 (泣) くつくつくつ。  
 M そりゃあ、いるかもしれないけど。  
 K そうしたら、鍋の準備をしたまま中身の具は永久におあずけだ  
 よー。食べられないよー。 (泣) くつくつくつ。  
 M (呆れて) いつでも切り身、シャケは売ってるよー。スーパーへ  
 行ってごらん。  
 K 切り身、シャケ、待てないよ！  
 M じゃあ、君はどうしたいの？  
 K (しらっと) 僕はサーモンにしておくよ。(了)

注。英語でいうサーモンとはタイセイヨウサケのこと、アメリカにいる  
 似たようなサケ科の別種の魚もサーモンと呼ぶようになった『朝日新聞』  
 2017年11月25日参照。

## 6. 知識と知恵

—漫才コンビ K & M (けいと&まさと) が舞台へ登場する。

K 君。知識と知恵の違い、分かるかい？

M 出てくる早々、何よ。

K だから、違いが分かるかって、僕は訊いているの。

M それくらい分かるよ。

K じゃあ、答えてみてよ。

M 小錦は元大関でハワイ出身だよ。千重はウドン屋の女将さんだね。簡単さあ。共通点はどちらも腰が強いってことだね。はいー。

K 共通点なんてどっちでもいいの。小錦？ 誰が相撲取りの名前を聞いているの？

M だって、君が今、小錦、知ってるか？ って訊いたから。

K 違うよ。小錦じゃなくて、知識、ち・し・き、だよ。それにウドン屋の女将さんはないだろ。

M そっかあ？ 銀座商店街の中にある老舗のウドン屋。

K そんな君が住んでいる近所のウドン屋なんて誰も知らないよー。

M 知らないから、教えてあげたのよ。町内じゃあ、有名よー。

K 違うよー。僕が訊いてるのは頭を使うほうの知恵、ち・え、だよ。いきなり、知識とか知恵って言うからだよ。

M ごめん、ごめん。こりゃあ、僕が悪かったよ。

M で、何を言いたいの？

K 僕は君が毎日新聞を読んで知識を蓄えたり、それを活かしているかどうか君に訊きたかったのさ。

M 君は毎日かあ。

K そうだよ。ずーと、毎日、読んでいる。

M 朝日も読売も、日経、産経もあるぞ。興味があれば、図書館新聞もある。

K その新聞の名前じゃない、昨日、今日、明日という毎日さ。

M じゃあ、最初からそう言えばいいのよ。

K あやまるよ。ごめん。で、もう一度訊くけど、知識と知恵の違い、分かる？

M (なげやりに) 知識だろ、知恵だろ。漢字からすると、どちらも何かを知っているってことだろ。

K その答えじゃあ、違いを説明してないよ。

M 君ねえ。知ってるんなら、教えなさいよー。僕に訊いて、僕がどれくらい物事を知っているのかを試すことはないだろ。それを知って、僕に何かイジワルでもするつもりかい？

K ピンポン。そう、君が今、しゃべったことが知識と知恵の違いさ。

M ピンポンって、僕は卓球じゃよ。

K 何、そのセンスのないダジャレは？

M センスがなければ、ウチワにするか？

K 違うよー。

M よく分からんなあ。

K いいかい。知識っていうのは何か物事についてよく知っているってことだよ。持っている情報の量と呼んでもいいかな。

M じゃあ、知恵は？

K 知恵はその知識を使って、ある物事を考え、判断し、処理する能力のことさ。

M もっと分かりやすい例えはないのかい？ 僕たちは漫才をしてるんだよ。お客さんが分かるように説明しなさいよ。

- K よし、こう説明すれば分かるだろ。
- M どう？
- K 君。漫才で儲けたお金を貯金してるだろ？
- M おいおい。今度は僕の貯金を狙ってるのかあ？
- K 違うよ。知識の説明だよ。知識っていうのは貯金と同じで、本を読んだり、人の話を聞いたりして情報を集めることだと考えればいい。
- M うんうん、集めるわけだ。
- K そう。それで君はなぜ貯金をするんだ。
- M おい、また僕の貯金かい？ やっぱり、狙ってるんだろ。
- K (語気強く) どうするんだよ。
- M そりゃあ、将来、家を買ったり、子供たちの教育資金として使うんだよ。そのためにコツコツ貯金をしてるんだ。誰だって、将来、使うために貯金してるよ。
- K そう、それが知恵ってことだよ。
- M 金を使うことか？
- K お金もそうだけど、集めた情報を、つまり知識をだね、何かにどううまく活かすかってことが知恵ってことさ。
- M そっかあ。知識は貯金で知恵はその貯金をどう使って活かすかってことだね。
- K そうそう。分かってくれた。小錦やウドン屋の女将じゃないから。(しらっと) うん。分かったよ。でも、なぜこんな話をするの？
- M ここからが本論さ。
- K だから、何を言いたいの？
- M だからさあ、君は知恵の元になる知識を集めるために新聞なんかを読んでるかい、っていうのが僕の君への質問さ。
- M 毎日新聞かい？
- K いいや、どこの新聞でもいいよ。新聞は知識の宝庫だから。
- M どっちの方向？
- K (怪訝そうに) ううん？ どっちの方向って何？
- M 君が今、知識の方向って言ったんだよ。
- K 言つてないよ。よく聞きなさいよ。知識の宝庫、ほ・う・こ、だよ。ほ・う・こ・う、じゃない。最後の「う」はいらぬの。知識がたくさん詰まっているってこと。
- M なるほど。じゃあ、君は新聞を読んで知識を蓄えると、それが知恵となつて人間性を良くするとも思っているのかい？
- K そう、そうだよ。ようやく分かってくれたねえ。知識が豊富でそれを知恵として活かせる人間は心が豊かになるだろ。
- M (強く) 君ねえー。そんなことを信じてるの？ 本当に新聞を読んでる？
- K 読んでるよー。自慢じゃないけど、隅々まで読んでる。
- M 毎日ね。
- K もう、それはいいから。
- M そうかなあ？ 違うだろ？ 人間、知識が増えると君が言うこととは逆でモラルやルールを守らなくなることもあるんだぞ。まっとうな人間になることを知識が邪魔をすることもあるんだ。
- K そうじゃないだろ。それじゃあ、何のために新聞や本を読んだり、教育を受けて知識や知恵を身に付けるのさ。
- M よろし、じゃあねえ、君に面白い調査結果を教えてあげるよ。新聞に出てたことだけだ。
- K どんな？
- M よく海外留学をすると異文化に触れて多様な価値観を認め合える



資質が高まるなんて都合のいい解釈をするよな。人間性が良くなるとも言っている。

K そうだよ。世界の色々な文化や慣習の違う国の人たちとの交流は相互理解をする心を養うからね。

M ところが、そうじゃないんだ。海外留学をすると、人間、*「ずるくなる」*傾向があるんだぞ。

K えーっ。そうじゃないでしょうよ。もつと詳しく教えてよ。

M うん。君の知識になるからね。フランスの高校生を対象に留学する前後で、ある問題が解けたか否かを問うアンケートに答えてもらったんだ。ただし、1問だけは答えがないものを入れてある。もちろん、全問正解者には賞品を差し上げるといふ条件でね。

K そうすると、どうなったの？

M そうすると、この答えのない1問について「解けた」とウソをついた高校生は留学1カ月前では30・1%いた。半年の留学後だと46・1%にまで増えたんだ。どうだあ。

K それはフランスの高校生たちの話だろ。

M いいや、同じことをアメリカの学生たちにもやってみたらどうだ。結果は同じだった。

K へーっ。留学すると「ウソ」をつく人が増えたってことだよな。どういうこと？

M うん。そうだよ。アメリカの学生たちを対象として性格検査をしてみると、この「ずるさ」は留学期間ではなくて、留学した国の数と関係があったんだ。原因は留学経験の「広さ」ということになる。

K なるほど。新たな知識を手に入れたよ。

M 異なる文化を知ると価値観が相対化されて偏見から自由になれる

と同時にモラル、道徳も見失うことになるんだな。だから、人間は色んなことを偏見なしに見ることは不可能で、君が言う知識がかえって邪魔をして本質を見えなくしている部分があるってことさ（『朝日新聞』、2017年10月12日）。

K なるほど、なるほど。

M なるほど、なるほど、じゃないよ。新聞、読んでるんだろ？

K よくこう言うだろ。

K 何を？

M お金持ちは知識を持っているから知恵が働いて脱税対策にヤツキになるけど、僕らみたいな貧乏人はそんな知識が無いから、知恵も働かず、真面目に税金を納めているって。

K まあ、誰でも税金は払いたくないからなあ。でも、税金だって、金持ちがたくさん払っているってことは、それだけ社会に貢献しているとも言えるよね。

M うんうん。そりやそうだ。その考えは正しいと思うよ。

K 君のさっきの話だと、留学経験は人間性を劣化させる一面があるってことだったけど、必ずしもそうならない人間だっているだろ。

M そりやあ、いるさ。知識の豊富な人がみんなズルをするわけじゃない。これは留学経験じゃないけど、震災、地震のことだけじゃ、この震災を経験した若者は他人を助けたり、他人の役に立つであろう仕事を志すようになるという調査結果もある。これも新聞に出てたことだよ。

K へーっ。そうなんだあ。

M そうなんだあ、じゃない。本当に、新聞を読んでものかあ？

K それはどんな調査なの？

- M 消防士、幼稚園の先生など「人助け」の度合の強い3職種の応募状況の推移を見ると、興味深い結果が出たんだ。
- K だから、どんな結果なの？
- M 1995年に阪神淡路大震災が発生したよね。
- K うん。大被害を受けた。
- M その被災地の神戸市など関西の5都市では応募人数が震災前と比べて震災後3倍にまで高まった。一方、被災していない関東の4都市では2倍程度だった。競争倍率も関西で明らかに高かった。
- K それは関西と関東を比べてただじゃない。
- M そうくるかあ？
- K そうきたよ。
- M 全国を対象として、94年以降に国内で発生した7地震の経験者たちが就いた職業をみると、医療や教育、警察などが多くて10%もいた。ところが未経験者は6・5%しかいなかったんだ。
- K で君は、自然災害は人々の価値観を自己中心から他人思いに変え、社会構造をも変化させるものである、と言いたいのだろ(『朝日新聞』、2017年9月7日)。
- M そうだよ。だから、知識、知識って言うけど、それは書かれたものだけじゃなくて、経験することからも得られるってことさ。
- K 問題はその知識や経験をどう活かすかってことが大切なんだね。
- M そう、知恵として実践するってことだ。
- K だから、今日、この漫才で僕は君が蓄えた知識をどう活かせば良いかという知恵を授かったよ。ありがとう。
- M ええーっ。違うだろ。君が僕に知識を蓄えろ！って言ったんだぞ。だから、知識は自分で蓄えてよね。僕に頼らないでよ。
- K 毎日、新聞を読むのも大変だから。

M あーあ。悔しいけど、悪知恵を付けちゃったかあー。(了)

## 7. 笑い噺 実態です

- 今日は、経済学部のお2人の先生から教育や研究について、お話をうかがいます。学生のみなさんには啓発になることを期待しています。では、最初にゼミナールのことをお聞きしましょう。ゼミ生の数は？
- 教授 M はい。毎年、20名くらいが応募してきます。よほどのことがない限り、全員受け入れてますよ。
- 教授 A ゼロ、もしくは3人だ。この人数だとマージャンができる。これ以上はこないし、きても追っ払うんだ。必ず、逃げていくよ。もつといいことはゼロなら、開講しなくてすむ。楽チンな時間がつくれるってもんだよ。ふっふっふっ。
- ゼミナールで扱う資料・文献と内容は？
- 教授 M 注目されている原書を1冊読み上げて、その間レポートを3本作成し、質疑をしています。英語の専門書を読みこなす能力と自分の意見を文章にする能力を鍛えることが目的だから。みんな頑張っついてきてくれます。頼もしいゼミ生たちですよ。
- 教授 A 読む年度は新書を1冊。読まない年度は4月に一度だけ集まって、みんなでファミレスで夕食をとり、その後、教室で会うことはない。でも、成績は最高点を付けている。たまにはマージャンに誘うときもある。そのときは全員出席だ。これでもゼミ生から文句を言われたことはない。以心伝心だな。
- 一番お金をかけているものは？

教授 M 書籍費です。年間50万円ほどの本や雑誌を購入しています。

もう自宅の書棚が足りなくてねえ。

教授 A 交際費だ。とくに、飲み代で、年間100万円は下らん。若い教員たちをつれて……。

—大学の教員として楽しいことは？

教授 M 一生懸命に研究し論文を執筆することと、学生たちと経済学について議論することですね。

教授 A 会議だ。会議のない週は胃の調子も悪い。その場で嫌なヤツの意見を潰すんだ。楽しいぞ。落胆したその顔を見るのは至福の時だな。ふっふっふっ。

—大学の教員って、みなさん博士の称号をお持ちですよ。

教授 M もちろんだよ。わたしは大学院を出てから、6年後に取得しましたよ。研究者としての肩書きだから、必須です。

教授 A 取得などしていない。取得する気もない。取得しても金にならないのだ。組織の中では持っていないから、ハタタリが利けば、いくらでも稼ぐことはできる。このわたしを見なさい。へっへっへっ。

—論文の評価・成果は？

教授 M 海外のレフェリー付きジャーナルに公開しています。いくつか先行研究として使われていますよ。グーグルスカラーで検索してみてください。

教授 A フリーペーパーなみの紀要にしか書けんし、書いたことがない。だから、自分の書いたものが論文の態をなしているのか、駄文なのかも判らん。同人誌レベルだ。文句ある？

—論文は何本くらい公開していますか？

教授 M 洋・和文を合わせると120本くらいです。30年も研究活動

をしているけど、まだ少ないですね。もっと頑張つて、書きますよ。

教授 A 本学に講師として採用されたときの1本、準教授に昇格したときの1本、教授に昇格したときの1本。合計3本だ。投稿先はさっきの紀要だよ。探せば、どっかにあるんじゃない。勤続35年、会議と講義だけに時間を費やしてきた。文句ある??

—論文を書く目的は？

教授 M 世のため、他人のためになる知見を提供することです。研究費をもらって研究をしている限り、研究者としての社会的使命ですから。

教授 A 自分のため、職を得るため、昇格のためだけに書いた。もう書かない。書いても金にならない！ 文章を書いても誤字脱字ばかりで、国語辞典が必要だ。誰も添削してくれん。くっくっく。

—教員、研究者のいずれで呼ばれたいですか？

教授 M 研究者ですね。最初に研究があつて、その成果を教育に還元するわけだから。もちろん教壇に立っているかぎりには教員でもいいです。

教授 A 教員？ 研究者？ 組織のもつと上の役職名……で呼ばれない。

—今、一番欲しいものは何ですか？

教授 M 勉強をして論文を書くための時間です。

教授 A だから、さらに上の役職……と金だつて。

—学生に期待することは？

教授 M 時間を有効に使つて、今しかできない勉強や趣味、スポーツ

などで青春を謳歌してください。

教授 A どうすればお手当てを支給される役職に就けるのか、を考えること。本を読んでも目が疲れるだけで無駄。講義をうまくサボって、バイトで稼ぎなさい。座学よりも現場で錬金術の  
みを身に付けなさい。金に勝るものはないだろう。へっへっ  
へっ。

—この際ですから、お聞きします。組織に期待することは？

教授 M 研究費を増額してもらって、会議を減らして欲しいです。

教授 A だから、判ってるだろ？ お手当ての付く役職は、わたし  
に・・・よ。

—まるで3割は働いて、その他の7割はぶらぶらしている蟻ンコの世  
界と同じじゃないですか？

教授 M わたしは研究や教育が好きですよ。だから大学の教員にな  
ったんだよ。

教授 A ふん。大学の教員だからといって、みんながみんな研究や教  
育が好きだと思わない!! (了)

付記。この嘯はフィクションです。筆者が所属する組織とは一切関係ありま  
せん。

